

おわりに

「井の中の蛙」 - 分科会に参加する以前の私たちは、まさにその状態だった。自館の現状や問題について不安を抱きつつも、自分の仕事だけを見つめ、それをこなすことに一生懸命で、日常業務の中に埋没していた。

そうしたなか、パブリック・サービス研究分科会に参加する機会を得た。さまざまな分野で活躍されている先生方の講義、他大学の図書館見学や図書館員との交流を通じて、いろいろなことを学び、考えさせられた。それについて、以下述べたい。

大学との協調について

文部科学省が、「21世紀 COE プログラム」(COE)や「特色ある大学教育支援プログラム」(COL)を打ち出したことにより、大学としても、研究支援に重点をおくのか、教育支援に重点をおくのか、あるいはその両方か、特色が出てくることであろう。それに呼応して、大学図書館も戦略を練らなければならない。

図書館経営について

この講義では、図書館員として必要な専門的な知識・技能について触れているだけではなく、ある分野において特化した図書館員が集まり、いかに連携し、有機的に機能していけばよいのかという組織論についても扱っている。図書館員自身にとっても、マネジメント意識を持つよい契機となることであろう。またこの『講義録』は、図書館員の専門性について、新しい時代に必要とされる図書館サービスを限られた資源で充実させるための、図書館経営者からみたインデックスだとも言える。多くの大学経営者、教員、図書館管理職に読んでいただければと願う。

専門性について

各館の事情・現状は随分異なるが、図書館員が専門職となることは、条件付きでどの大学でも可能であると思う。その条件は、図書館の規模によるものではない。自館の職員に加え大学の構成員や利用者が、「機能的な組織にしたい」、「専門職が必要である」と、どれだけ思うかということにかかっている。大切なのは、大学という組織において、図書館が何を指すか、その実現のために、日々の業務の中で個々の職員の専門性が深まっていく組織であるかということである。

自館への還元について

分科会で学んだことには、すぐに職場で実行できるものと、現状では実現困難に思えるものがある。大切なのは、自館の政策や目標をしっかりと認識した上で、その実現に向けてどのような方法やサービスがあるのか具体的にプランを立て、周囲に働きかけることである。そして、将来の可能性に期待する気持ちを持ち続けることである。実際に何校かの大学図書館では、改善の気運が高まったり、研究会が発足したりする等の展開があった。

私たちは分科会で習得した視点や知識を自館に還元しようと努めているが、そうした動きが大学図書館界全体にも広まればという思いは、私たちに共通の願いである。分科会参加者のベクトルは同じ方向を向いている。そのことを確認し、今後も励ましあえる仲間をもったことも分科会の大きな収穫であった。

最後に、講師の先生方にここに記して感謝申し上げます。

『講義録』作成担当：

学習院大学図書館	片桐 智子
駒澤大学図書館	川越 智之
成城大学図書館	坂本 純子
成城大学図書館	鷹尾 道代
東海大学図書館	種田 環
東邦大学習志野メディアセンター	齊藤 元彦